

デーリー東北

2021年(令和3年)3月25日(木曜日) (19)

私見創見 Thursday

研究対象として私が眺めるのは、厳しい環境に生き抜く植物だ。海岸の岩場というのは、強すぎる日差し、薄い土壌による乾燥、海水や潮風など、植物にとって厳しい環境の一つである。花をつける植

物の研究ほどではないが、かかったが、2010年、八戸から久慈にかけての海岸植物の研究を始めた。対象としたのは、砂浜植物や塩性湿地ではなく、「海崖植生」という主に岩場やその

周辺の薄い土壌の上に成り立つ植生だった。小舟渡並より南の八戸市内の海岸には防波堤や防波堤などがほとんどないため、海の影響をダイレクトに受ける海岸植物の研究には絶好の調査地だ。一般に海岸では、海から離れるにつれて、波しぶきや潮風の影響を受けにくくなるため、だんだんと海岸に特有の植物の種や被度、生えている割合が減っていく。八戸から久慈の自然海岸での詳細を知るため、2010年の夏に汀線(海と陸の境)から内陸に幅10メートル程度の調査区を設け、その中に四方の方形区に区切って、すべての植物の種名、各種の被度や基質(岩や砂などの地面の様子)をパーセントで調べあげた。

三陸海岸の植物

厳しい環境下で植生を維持

ハマボツス、キリンソウなどが明らかに増えた。研究室の典型的な海岸植物。だんだんと土壌の面積が増えれば、岩の隙間に根を貼るハマキク、砂まじりの場所に生育するウンランなど、海から陸へ帯状に置き代わっていく種構成や、岩や砂などの細かな基質の違いによる分布の差異など



鮎川 恵理

八戸工業大 生命環境科学科准教授

あゆかわ・えり 1973年東京生まれ。総合研究大学院大博士課程修了。2004年から八戸工業大で勤務。植物生態学が専門で、コケ植物の生態や海岸植物が主なテーマ。青森県環境審議会委員などを務める。00~01年の第42次南極観測隊に参加した。

上は成り立つ植生が、土壌ごとにはぎとられた箇所がいくつかあった。津波から3カ月もたたない6月初めには、前年と変わらぬ海岸性のヒロハクサフジが開花していた。岩の隙間の土がなくなり、根の一部を空中に出しながらも成長を続けるハマキクは秋には開花したし、土がなくなつて跡だらけの場所にはハマヒルカオが旺盛に伸びていた。

津波により、海岸に固有の植物の多くの種は、一時的に消滅することはあっても生き残る種もいた。反対に、オオバコやススキ、カモヤササなどの荒地植物や帰化植物などは全般に減っていた。

さて、このような海岸植生を受けたのだからと想像したが、しかし、いつも海水のストレスにさらされている自然海岸の植物にとっては、たいたいことではない。津波や高潮、波浪は、競争力の強い侵入者であるやっかいもの種を排除し、海岸に固有の植生を維持するための、ありがたい自然攪乱の要素だったといえよう。生物の生き方には、調べてみなければわからないことがまだまだ多い。

また、母校の東京農工大の先輩や後輩との共同研究で、このエリアには小規模な遊地が多数あり、種の多様性を高めている重要な要素であることが明らかになった。湿地では、陸側から染み出す淡水が継続的に得られたため、津波直後も塩害のような影響を受けることはなかった。あの大津波の人的な被害、印象に残る高田松原の消失などの映像から、一旦、八戸周辺の海岸植生も大きな被害を受けたのだらうと想像したが、しかし、いつも海水のストレスにさらされている自然海岸の植物にとっては、たいたいことではない。津波や高潮、波浪は、競争力の強い侵入者であるやっかいもの種を排除し、海岸に固有の植生を維持するための、ありがたい自然攪乱の要素だったといえよう。生物の生き方には、調べてみなければわからないことがまだまだ多い。

※この記事・写真等は、デーリー東北新聞社の承諾を得て転載しています。